

平成22年度 大学図書館職員短期研修
京都会場（2010.10.6）東京会場（2010.11.10）

学術情報リテラシー教育入門

教育との連携を目指して



神奈川大学図書館 総合サービス課
吉場 千絵

本日の内容

1. 神奈川大学図書館のセミナーへようこそ！
2. 情報リテラシー教育の再考
 - ・ 情報リテラシーとは何か
 - ・ 学内でどう動くか
 - ・ 学生に何をどう伝えるか
3. 今後の課題

1. 神奈川大学図書館のセミナーへ ようこそ！

(FYS「情報探索と問題発見」のコマより)



＜参考＞神奈川大学について キャンパス



1928年創立（平塚は1989年開設）

〈参考〉神奈川県について キャンパス

・横浜キャンパス

在籍者 15,171名（うち院生515名）

法学部・経済学部・外国語学部

工学部・人間科学部

約19,000名の
学生が学んでいます！

・湘南ひらつかキャンパス

在籍者 3,925名（うち院生143名）

経営学部・理学部

教職員 1,656名（うち専任718名）



<参考> 神奈川大学について 図書館

- 横浜図書館

蔵書冊数 約100万冊

図書館職員 約50名（うち専任8名）

所蔵冊数
約**117万冊**

- 平塚図書室

蔵書冊数 約17万冊

図書室職員 15名（うち専任2名）



* 利用対象者

大学構成員・一般登録会員・相互協力大学関係者

2. 情報リテラシー教育の再考 今、足りないものは何なのか？



2-1.情報リテラシーとは何か

改めて考えた

1989年 米国図書館協会 (ALA)

情報リテラシー委員会最終報告書

情報リテラシーとは、

「情報の必要性を認識し、情報を入手・
評価し、効果的に利用する能力」

2-1.情報リテラシーとは何か

改めて考えた

学術審議会「大学図書館における電子図書館的
機能の充実・強化について」建議（1998）

＜情報リテラシー教育への支援＞

電子的情報資料の有効利用を含めた，情報リテラシー（情報利活用能力）教育の重要性も認識されてきており，こうした情報リテラシーを前提とした，学生の自主的な学習活動も推奨されている。

大学図書館は，これら電子的教材作成，情報リテラシー教育及び学生の自主学習等に対する支援において，その一翼を担うことが求められている。特に，学生向けの利用者教育は，情報リテラシー教育の一環として，大学図書館の協力の下に，全学的に取り組むことができるよう，教育体制の整備が必要である。

2-1.情報リテラシーとは何か

改めて考えた

2000年 米国大学・研究図書館協会（ACRL）

「高等教育のための情報リテラシー能力基準」

情報リテラシーを身につけた学生は、

- ・必要な情報の性質と範囲を見定める
- ・必要な情報に効果的かつ効率的にアクセスする
- ・情報と情報源を批判的に評価し、選択した情報を自らの知識基盤と価値観に組み入れる
- ・個人として、あるいはグループのメンバーとして、特定の目的を達成するために情報を効果的に利用する
- ・情報の利用とアクセスを取り巻く多くの経済的、法的、社会的な問題を理解し、倫理と法律に反しないように情報を利用する

2-1.情報リテラシーとは何か

改めて考えた

つまり、

情報リテラシー能力を習得することにより可能になること

- どのような時に、どのような性質の情報が自分にとって必要であるかを知ることができる
- どのように情報を探すべきかの的確に判断し、効率的に情報を入手することができる
- 情報を批判的に評価・取捨選択し、倫理に反しないよう適切に利用することができる
- 既存の知識の独自性を尊重しつつ、新たな洞察を生みだすことができる

2-1.情報リテラシーとは何か

改めて考えた

文部科学省「学術情報基盤実態調査」(2010)

- ・ コンピューター及びネットワーク編に「情報リテラシー教育」に関する質問項目がある(大学図書館編にない)
- ・ 「教育内容としては、実施している大学のうち、77.9%の大学(556大学)が学内LANを利用するために必要な操作方法やルールを、69.5%の大学(496大学)が倫理・マナーを全学生に対して実施しています」

2-1.情報リテラシーとは何か

改めて考えた

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」
答申（2008）

- 学士力に関する主な内容の1つに「汎用的技能」（知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能）があり、その中に「情報リテラシー」と明記されている
- しかし、「情報リテラシーとは、情報通信技術（ICT）を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる」技能と示されている

2-1.情報リテラシーとは何か

改めて考えた

科学技術・学術審議会学術分科会

「学術情報基盤としての大学図書館等の今後の
整備の在り方について」(2006)

図書館サービスの問題点

情報リテラシー教育の位置づけが不明確

「現時点では、多くの大学で行われている情報リテラシー教育は教養教育及び各専門分野における教育との連携が不十分であり、効果が限定的である」

2-1.情報リテラシーとは何か

改めて考えた

つまり、

- ・「情報リテラシー教育」に対する世間一般の認識の違いを意識し、その違いを埋めていく作業が図書館側には必要
- ・教育との連携が必要

この背景には、図書館が生き残りをかけ、従来の「利用教育」を「情報リテラシー教育」へ乗り換えた…という事情も。

2-2.学内でどう動くか考えた

図書館だけでやっても先がないのでは？

図書館でのセミナーや量は、認識されてきている。

→教員との協働の必要性

「図書館単独で授業を行っていても、機会や時間は限られており、学生の実際の大学での学びや課題といった文脈から切り離されていると、望ましい効果は期待できない」

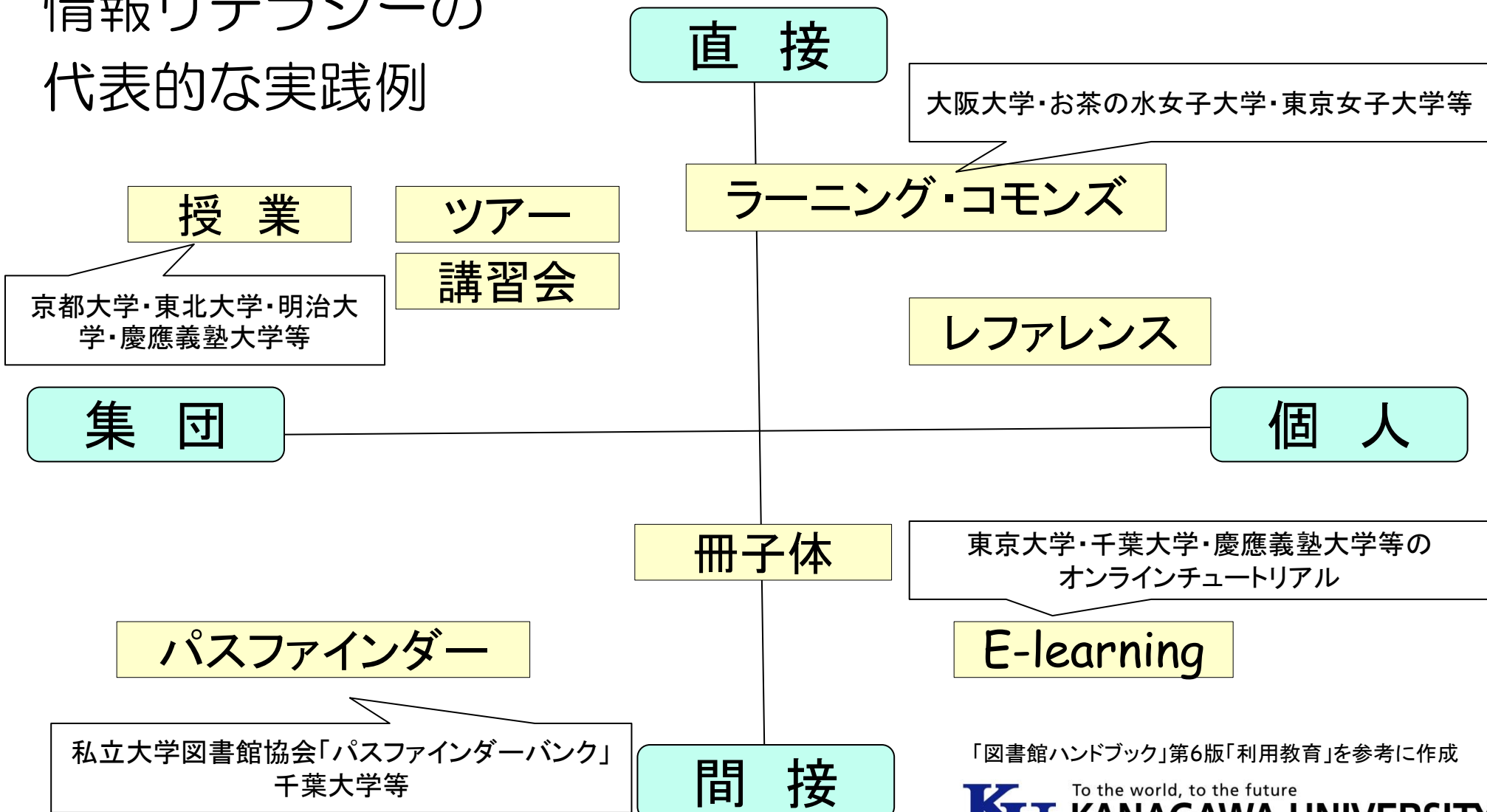
上岡真紀子, 市古みどり.図書館員による情報リテラシー教育；現在・過去・未来.

現代の図書館.2007,45 (4) ,p226-233.

→教育との接点、突破口を探る！

2-2.学内でどう動くか考えた

情報リテラシーの 代表的な実践例



「図書館ハンドブック」第6版「利用教育」を参考に作成

2-2.学内でどう動くか考えた

神奈川大学での突破口 →

ファーストイヤーセミナー (FYS)

FYSとは…

- 全入学時代に育ってきた、多様な新入生に対応するための初年時教育科目として、2006年度より開始
- 半期の必修科目
- 全新入生を1クラス25名程度に分け、教員全員が学部横断的に教育指導にあたろうという基本精神のもとスタート

2-2.学内でどう動くか考えた

今年度の変化

FD委員会（FYS教育小委員会）へのアプローチ

これにより

- ・ 図書館側の考えを伝え、授業内容・目標に反映できた。
- ・ FYSのテキストへの執筆ができた
- ・ 図書館発行の「情報リテラシーテキスト」に反映できた
- ・ 教員へのアンケートができた（FD委員会に結果提出済）
- ・ アンケートと一緒に個別セミナーの案内ができた
- ・ FYSカリキュラムに合わせた集合セミナーの開催ができ、結果参加者が増えた
- ・ ゼミでのセミナー希望も増えた

2-3. 学生に何をどう伝えるか考えた

まず確認すること

- ・ 図書館として、誰をどうしたいのか？
- ・ 何を伝えたいのか？
- ・ それは学生の要望にあっているのか？

(条件分析・3P分析)

まずは聴き手の分析から！

2-3. 学生に何をどう伝えるか考えた

聴き手の分析

- ① 自らの意思ではなく、授業だからしょうがなく出席
(具体的に困っている訳ではない。聞かせるのは至難の業)
- ② いつも眠い。大人数の授業なら寝てもわからない?
- ③ 既に図書館に来たことがある学生が結構いる
- ④ OPACはほとんど使ったことがない
- ⑤ 高校までの図書館経験は薄い (請求記号って何? 並び方?)
- ⑥ 事前に資料を配っても、ほぼ見ない
- ⑦ これからレポート課題が絶対にある
- ⑧ パソコンは使えるから、自分に関係ない
- ⑨ 大学に慣れる方が実はまだ優先……

2-3. 学生に何をどう伝えるか考えた

- 何故図書館があって、図書館の利用を薦めるのか？その理由を知ってもらおう

WHY?

- 図書館の各種ルールを知ってもらおう
(資料の並び方・検索・利用方法・マナー)

HOW TO

*伝えたいところは**最初**に。**インパクト**をもって。

*聞くだけではなく、**作業**をしてもらう。

3. 今後の課題

- ・ 教育というソフトの面での連携を深める
(初年次教育を入口に、FD委員会等教学組織への参加)
- ・ ラーニング・コモンズというハード面も含めた教育との連携を深める

「今後ラーニング・コモンズの実現を通して、両者の協調協力関係がより積極的に、重要になると思われる。そしてそのことはまた、図書館の情報リテラシー教育の枠組みが今後更に「拡大」され、従来の図書館の領域から離れた内容も含まざるを得ないことも意味する」

上田直人,長谷川豊祐.わが国の大学図書館におけるラーニング・コモンズの事例研究.

名古屋大学附属図書館研究年報,2007,p47-62

ご静聴ありがとうございました

